

早稲田大学審査学位論文  
博士（人間科学）  
概要書

注意の範囲モデルに基づく反すうの持続過程  
The sustaining process of rumination based on  
the attentional scope model

2020年7月

早稲田大学大学院 人間科学研究科  
佐藤 秀樹  
SATO, Hideki

研究指導担当教員： 鈴木 伸一 教授

# 博士学位論文概要書

人間科学研究科博士後期課程 6 年 佐藤 秀樹

## 第 1 章 反すうと注意の範囲に関する研究動向と課題

うつ病は、日本を含む世界で主要な精神疾患の 1 つであり、深刻な社会問題となっている (WHO, 2017)。抑うつ維持・増悪と関連する認知行動的反応の 1 つに反すうがある。反すうとは、「抑うつの症状や原因・意味・結果に繰り返し焦点づけられている反応様式」と定義される (Nolen-Hoeksema, 1991)。

抑うつと反すうの関連や反すうの持続を説明するモデルとして、感情ネットワークモデル (Bower, 1981) や、資源分配モデル (Ellis & Ashbrook, 1988) と資源消耗モデル (Levens et al., 2009) を含む認知資源の枯渇モデルがある。感情ネットワークモデルや認知資源の枯渇モデルは、反すうの認知的情報処理を説明するうえで広く用いられているものの、これらでは説明ができない知見も報告されている (Altamirano et al., 2010; Gotlib & Joormann, 2010; Zetsche et al., 2012)。

従来の反すうモデルの問題点を克服しうるモデルとして、注意の範囲モデル (Whitmer & Gotlib, 2013) がある。注意の範囲モデルでは、ネガティブな話題を繰り返し考えると注意の範囲が狭くなり、情報の取り込みが制限される。そのことで、特定の話題に限定された思考が繰り返し生じ、反すうが持続すると説明される。実際に、反すうと注意の範囲の狭さの関連を示す研究も報告されており (Grol et al., 2015; Fang et al., 2017; 2018)、感情ネットワークや認知資源の枯渇で説明されてきた知見も説明することができる。

注意の範囲モデルは反すうの認知的情報処理を説明するうえで有用であると考えられるが、以下の問題点が存在する。第 1 に、注意の範囲モデルを検討した先行研究では、横断研究デザインで反すうとワーキングメモリの関連を検討しているため、変数間の因果関係は明らかにされていない。第 2 に、反すうを実験的に操作した場合、操作チェックとして状態反すうを定量的に測定する必要があるが、本邦ではそうした尺度は開発されていない。第 3 に、従来の反すう操作では思考内容の感情価のみを操作しており、思考時間が操作されていない。第 4 に、反すうと注意の範囲が抑うつを維持・悪化させるプロセスは明らかにされていない。

## 第 2 章 先行研究の問題点と本研究の目的

第 1 章をふまえ、反すうと注意の範囲に関する先行研究の問題点を整理すると、第 1 に反すうや注意の範囲を実験的に操作し、内的妥当性の高い知見を示す必要があること、第 2 に状態反すうを定量的に測定するための尺度を開発する必要があること、第 3 に思考内容の感情価と思考時間の観点から反すうを実験的に操作する必要があること、第 4 に注意の範囲の観点から反すうの持続過程に関する検討を行う必要があることが指摘された。これらの検討課題を解決するために、本研究では注意の範囲モデルに基づく反すうの持続過程を検討することを目的とした。なお、本研究はすべて早稲田大学「人を対象とする研究に関する倫理審査委員会」の承認を得て実施された (承認番号: 2018-024, 2018-119, 2019-022)。

## 第 3 章 Rumination about an Interpersonal Offense Scale (RIO) 日本語版の作成と信頼性・妥当性の検討 (研究 1)

研究 1 では、状態反すうを定量的に測定する RIO 日本語版の作成と信頼性・妥当性を検討することを目的とした。本研究では大学生と大学院生 208 名を分析対象とし、再検査信頼性の検討では 55 名を分析対象とした。研究 1 の結果から、RIO 日本語版は原版と同様に 6 項目 1 因子構造であり、信頼性と妥当性

を有することが示された。また、RIO 日本語版は6項目という少ない項目数で構成されることから、回答の負担も小さい尺度である。このことから、RIO 日本語版は状態反すうを測定するのに有用な尺度であるといえる。

#### 第4章 反すうによる注意の範囲の差異——思考内容の感情価と思考時間からの検討——（研究2）

研究2では、反すうによる注意の範囲の差異を検討することを目的とした。その際、反すう操作の条件として、思考内容の感情価と思考時間の2要因を設定した。研究2では大学生と大学院生68名を分析対象とした。本研究の結果から、まず、ネガティブな話題を長く考える操作を行うと、ネガティブな話題を短く考える操作やニュートラルな話題を考える操作を行うよりも、状態反すうとネガティブ感情が悪化することが示され、反すう操作の妥当性が確認された。また、ネガティブな話題を長く考える操作を行うと注意の範囲が狭くなることが示され、仮説は支持された。

#### 第5章 ネガティブ気分下の注意の範囲が反すうに及ぼす影響（研究3）

研究3では、ネガティブ気分下の注意の範囲が反すうに及ぼす影響を検討することを目的とした。研究3では大学生と大学院生42名を分析対象とした。本研究の結果から、まず、ネガティブ気分誘導後の注意の範囲の操作は妥当であったことが確認された。また、実験群では、ネガティブ気分誘導後と注意の範囲の操作後はネガティブ気分誘導前よりも状態反すうが有意に高く、注意の範囲の操作後では、実験群は統制群よりも状態反すうが有意に高いことが示された。加えて、ネガティブ気分誘導後の注意の範囲の変化量と状態反すうの変化量の間には正の相関が示された。このことから、「ネガティブ気分誘導後に注意の範囲を狭める操作を行うと状態反すうは悪化する」という仮説は支持された。

#### 第6章 総合考察

本研究の結果を総括すると、研究1の結果からRIO 日本語版は状態反すうを測定するうえで有用な自記式尺度であること、研究2の結果から反すうは注意の範囲を狭めることと、研究3の結果からネガティブ気分を経験しているときに注意の範囲が狭くなると反すうが悪化する可能性が示された。このことから、反すうと注意の範囲の狭小化は互いに影響しあうことで反すうが持続すると考えられる。

本研究の結果から、ネガティブな思考内容と思考時間の相互作用が反すうの程度を規定するという微視的視点と、反すうとネガティブな認知的情報処理の関連性という巨視的視点から、反すうの持続を理解することができると考えられる。まず、研究2における反すうの操作チェックの結果から、ネガティブな話題を長く考えることが状態反すうとネガティブ感情を悪化させることが示された。この場合、ネガティブな話題を長く考えることで、自己に関するネガティブな表象が活性化し、こうした思考がさらに持続してしまうことが示唆される。また、研究2と研究3の結果から、反すうが注意の範囲を狭めることで、反すうの制御に必要な情報の取り込みが制限され、さらに反すうが悪化することが示唆された。これは、抑うつとネガティブな認知情報処理の相互に影響しあうプロセスを反すうと位置づける抑うつの処理活性仮説や、反すうはネガティブな自己注目を強めることで、ネガティブ感情とネガティブな認知の悪循環が形成されるという指摘（Ciesla & Roberts, 2007）からも推察される。反すうと注意の範囲の関連は、機能的磁気共鳴画像法を用いた認知神経学的知見からも支持されると考えられ、効果的な気そらしと反すうに対する認知バイアス修正法という臨床応用可能性につながることを示唆された。

本研究の知見は、方法論上の問題を含む限界点が存在するものの、これまで検討されてこなかった反すうと注意の範囲の相互影響性によって反すうが持続することを示唆したことから、人間科学に一定の意義を提供するものと考えられる。